

ソシユールの記号概念と聴き手の立場

— 記号の図の矢印について ⁽¹⁾

末 永 朱 胤

はじめに

周知のように、20世紀初頭、現代言語学の父ソシュールは言語現象の全体 (langage) を言語体系 (langue) と発話行為 (parole) に分け、前者を来るべき言語研究の中心的対象とした。この言語と発話への言語現象の分割と、前者の選択こそ、戦前に地歩を固めた構造言語学が、第二次大戦後には言語学の枠を超えて諸分野に影響を及ぼし、構造主義、記号学という潮流となって世界を席卷した大きなうねりの原点である。しかし、それはまたソシュール言語学における発話理論の欠如という批判的評価の震源でもあり続けた。言語学説史におけるポスト・ソシュールの重要な一面は、談話理論、言表行為論、言語行為論、語用論など、ソシュールに欠けていたとされる、「発話の言語学」の興隆によって徴づけられるともいえよう。

この「ソシュールにおける発話の学の不在」なるステレオタイプに対して、われわれは別のところで次のような視点を提起した。

1. ソシュール以後の代表的な「発話の理論」としてバイイの言表行為論、オースティンの言語行為論、バンヴェニストの談話理論を検討し、総合すると、あらゆる発話は話す主体としての一人称「私」に収斂する意味構造をなしていることが明らかになる。発話理論を支えるロジックは話し手の視点である。
2. 発話への対立項として特徴づけられるソシュールの言語の概念自体に、深く言表行為論的発想が潜んでいる。
3. いわゆる発話の理論が話し手「私」のロジックであるなら、ソシュールの「言語の言語学」とは、実は聴き手「あなた」に照準した聞き手の理

論であり、ポスト・ソシュールの発話の言語学に先回りし、その裏面をなす、いわば裏側からの言語行為論なのである（とくに末永、1998 および Suenaga, 2005, deuxième partie 参照）。

このような、ソシュールの言語概念を支える聴き手のロジックは当然のことながら、その記号概念にも貫かれている。我々は言語記号の半面をなすニフィアン（音声面）が、ソシュールにおいてなぜ「調音像」ではなく「聴覚像」なのかを、ソシュールの言語概念が聴き手の立場に定位していることから説明した（末永、1998）。ソシュールにとり、言葉（言語記号）とは、したがって言語とは、話し手の側にはなく、耳に響くものとして聴き手の側に見いだされるのである。

このように、一人称と二人称の根源的な非対称性という視点は、ソシュールにおける言語と記号の概念を明らかにするための一つの重要な鍵である。そしてこの視点には、ソシュールの死（1913年）の後、その講義に出席していた学生たちのノートを主な資料とし、後の構造主義と記号学のバイブルとなる『一般言語学講義』（1916）（= *CLG*）を編集・刊行して、二十世紀思想史の重要な流れを発動したバイイとセシュエも、またさらにそれに続いた無数のソシュールの「弟子」たる構造主義者、記号学者も、十分に意識的ではなかったように思われる。ソシュールの名が常にその父として冠せられる構造主義であり記号学だが、「師」における「発話の研究の不在」を嘆いた構造主義者たちが「聴き手の立場」に無自覚であったことは、二十世紀思想の神話の影で、ソシュールと「後継者たち」との間に連綿と開けている微妙で深刻な乖離を示唆しているのではないか。

本稿は、原資料のソシュールと『講義』との間に垣間見られるささやかな

齟齬の指摘から発して、ソシュールの記号概念における「聴き手の立場」を再確認する作業である。

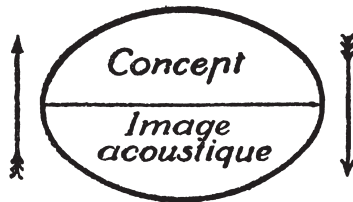
議論は次のように進められる。

1. はじめに『講義』においてソシュールの言語記号の概念が提示される有名な一節を見、そこに掲げられている図に込められている記号観を考察する。次にその図を原資料とつきあわせ異同を探る。
2. ソシュールがその言語概念を抽出した議論を振り返り、そこに一貫する視点を確認する。これを踏まえて、原資料の記号の図と『講義』の記号の図との違いの裏にある言語概念の違いを考察する。

1. 記号の矢印

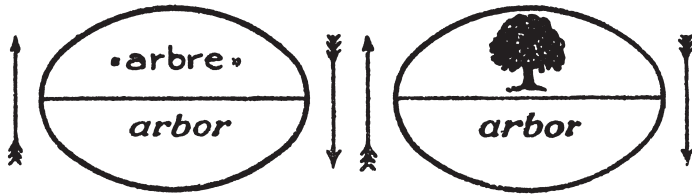
『講義』はその第一部「一般原理」の冒頭で言語記号の概念を説明図つきで提示する。

言語記号はしたがって二面からなる心的存在であり、次のような図で表すことができる。



この二つの要素は固く結ばれ、互いに呼び起こし合う。ラテン語

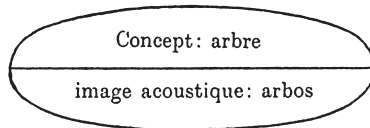
arbor の意味をとらえようとするにせよ、ラテン語で《樹木》を意味する語をとらえようとするにせよ、言語が容認する [音と意味の] 結びつきのみが現実と合致すると思われるのは明らかであり、我々はそれ以外のどのような結びつきもしりぞける。



(CLG, p.99)

ここで述べられているのは、語（言語記号）が音（聴覚像）と意味（概念）から成る二重体であること、語をなす音と意味は互いに喚起することである。そして図ではラグビーボールのような楕円形で示された記号の左右にそれぞれ一本ずつの矢が配されている。左の矢は下から上に向かい、右の矢は上から下に向かっている。二本の矢は、語をなす音と意味が互いに惹起する関係にあることを示している。下（聴覚像、シニフィアン）から上（概念、シニフィエ）に向かう左の矢は、音が意味を呼び起こすこと（「ラテン語 *arbor* の意味を [音から発して] とらえようとする」）を、上から下に向かう右の矢は逆に意味がそれを表現する音を喚起すること（「ラテン語で《樹木》を意味する語をとらえようとする」）を示している。図は音（聴覚像）と意味（概念）の不可分離性、相互喚起性を示している。記号概念の明快な説明となっているといえよう。

だが、このバイイとセシュエによる『講義』の文章を、学生ノートの、その元になったと思われる箇所とつきあわせると奇妙なことに気付く。その箇所とは第三回講義（1910–1911年）、デガリエ⁽²⁾のノートの186ページだが、そこには、まず、『講義』の図にあった二本の矢印が見あたらない。さらに『講義』において、この矢印による説明とよく呼応していた文「この二つの要素は固く結ばれ、互いに呼び起こし合う」もまた、それに対応するものがない。つまり学生たちの聴講ノートを資料にして執筆された『講義』の文章だが、この文は編者による「創作」の一つである。以下が問題のデガリエのノートだ（1911年5月2日）。



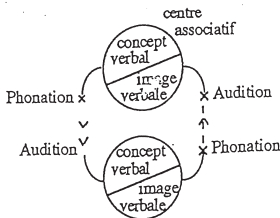
我々は、これ〔聴覚像と概念の結びつき〕とは異なるようないかなる結びつきも、記号が含む二つの項〔音と意味〕に関する研究においては間違った道として捨て去る。（断章 1107,1109）

（断章番号は Saussure, 1968, 1974 による）

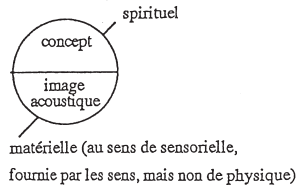
『講義』との違いは、第一に、上で述べたように、記号の図に矢印がないこと、第二に図はこれだけで、『講義』にあるあとの二つの記号の図も見当たらないことだ。

『講義』の記号の図には矢印がついていて、原資料にはないのはなぜか。また、記号の図に関してこのような『講義』と原資料の不一致が起きるのは

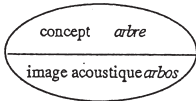
この箇所だけか。学生たちのノートはソシユールが講義中しばしば図を描いて説明していたことを証言しているが、楕円形の(ときとして円形の)図形で一個の言語記号を表している箇所が第三回講義だけに限っても十数カ所、楕円(または円)の個数にして数十ある。そのなかで一個の言語記号の音声面と意味面の関係を表す図形が十以上あるが、では『講義』p.99のような二本の下向きと上向きの縦の矢印がついている例はあるか。皆無である。では一本のものは。これは七個あるが、下から上に向かう矢印のものが四個(6月30日の授業で一個、7月4日の授業で三個)、あとの三個は両端に矢じりのついた一本の縦の矢印が楕円の真ん中にあるものである(絶対的恣意性と相対的恣意性について説いた5月12日の授業。ここでの上下の方向を示す縦の矢印は、相対的恣意性が記号どうしの横の関係から成ることに対し、絶対的恣意性の、記号を孤立した個として見る視点を表している)。



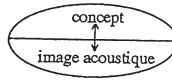
4月25日



5月2日

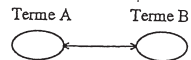


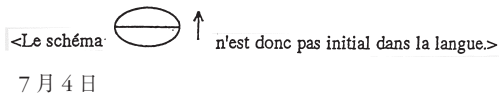
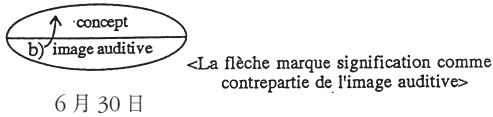
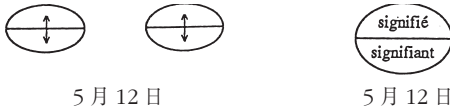
5月2日



5月12日

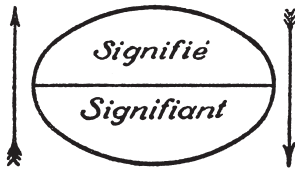
et d'autre part cette relation



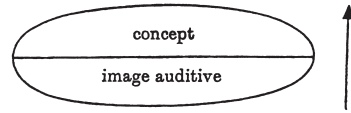


(Saussure, 1993 による)

このように、ソシユールが実際に一般言語学講義の教室で黒板に描いた多くの記号の図のなかには、『講義』に出てくるような両側に下向きと上向きの二本の矢印が添えられているものは皆無であること、つけられても一本であり、基本的にそれは下から上に向かい、上から下に向かう矢印は見あたらないことが確認される。ちなみに『講義』では p.99 のほかに、p.158 と p.162 にも二本の矢印の添えられた楕円形の記号の図があるが、この二カ所とも、それに対応した学生ノートに同様の図はない。学生ノートの p.158 の図に対応する箇所には下から上に向かった一本の矢印を伴った記号の図が、p.162 の図に対応する箇所には矢印を伴わない楕円の図が記されている。



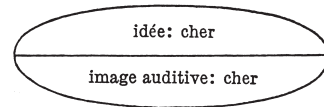
(CLG, p.158)



(断章 1858, デガリエのノート,
6月30日)



(CLG, p.162)



(断章 1898, デガリエのノート,
7月4日)

このように記号の図に添えられた矢印に関して生じている原資料と『講義』との齟齬は何を意味するのか。その源はどこにあり、どのような言語観の違いを反映しているのか。なぜ実際にソシュールが描いた記号の図には上から下に、すなわちシニフィエ（概念）からシニフィアン（聴覚像）に向かう矢印が決して出てこないのか。次では、ソシュールがその中心的研究対象たる言語の概念を明確化した第三回講義での議論を追跡することを通じ、この問題を検討する。

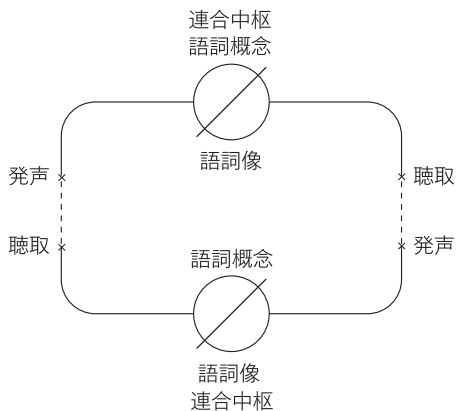
2. 発話の回路

ソシュール研究史上つねに問題にされてきた「言語」と「発話」に関する概念規定だが、ジュネーヴ大学で一般言語学を講じた三回の通年講義では

(1907年、1908–1909年、1910–1911年)、つねに両者を対比的に説明することにおいては一貫していたとはいえ、最も図式的に明快なのは第三回講義での言語と発話の定義にいたる議論である。ソシュールは、言語は個人の言語活動 (langage) のレベルにおいて観察されなければならないとし、次のような「発話の回路」と呼ぶ図式を提示する。

ランゲージュが活動する様々な領域の中で、我々にとりラングに当たる特殊な領域を考察しよう。

これらの領域は個人の行為において観察されねばならない。個人の行為は、それがランゲージュ (言語活動) である以上二人の個人の存在を前提にしている。こうしてパロールの回路と呼ぶことの出来るものを完全な形で得るだろう。



純粹に心的な連合の中心〔中枢〕において語詞概念と語詞像が結合されている。 (断章番号 194–196, 198、コンスタンタンのノート)⁽³⁾

ソシュールはこの発話の回路を次のように様々に分析する。

- 1° 純粋に物理的な部分：音波
- 2° 生理学的部分：発声と聴取
- 3° 心的要素として語詞像（または聴覚像）がある。この語詞像は音という心的ではない（物理的）部分とは完全に区別されるべきである。語詞像（または聴覚像）とは、心的感覚に変換された音である。これはそれに結び着けられている概念と同じくらい心的なのだ。概念も聴覚像も同様に心的である。

（第三回講義、コンスタンタンのノート、断章番号 202, 204–206）

言語記号（言葉）の概念（意味）と聴覚像（音）がともに心的であるという指摘に注意しておこう。さて、言語現象をこのように心的、生理的、物理的の三つの次元に分割したソシュールは、さらに次のような分割も提案する。

- 1° 回路の外的部分と内的部分への分割。外的部分は唇から耳へと伝わる音波によって表される。もう一方の内的部分は残りの全てである。
- 2° 物理的部分（発声器官の振動と運動）と心的部分（残りの全て）への分割。発声器官は物理的部分に入れることが出来る。
- 3° 受動的部分（聴取から連合中枢へ）と能動的部分（連合中枢から聴取へ）という分割も見て取ることが出来る。（第三回講義、コンスタンタンのノート、断章番号 208–210）

外的と内的（身体の内外的）、心的とそれ以外、受動（聞き手）と能動（話し手）

という三通りの分割である。では、以上のような発話の回路の様々な分割は、言語現象の全体から言語概念を抽出するというソシユールの狙いとどう関わるのか。

個人のケースにとどまって、全ての語、反復して現れるであろう全ての場合に関してこの回路を考察すれば、もう一つの区分を付け加えなければならぬだろう、それは(受け取られる語詞像が複数であるかぎり)少しずつ意識に到達するあの全体を配列するための恒常的な配列作用である。これらの語詞像は主体にとっての特定の秩序へと整序されるだろう。この配列作用によって我々はラングの観念に近づく。

(コンスタンタンのノート、断章番号 212, 214-215)

ソシユールは聞き手の意識に到達する複数の語詞像(聴覚像)を配列する働きに言語なるものの特性が現れている(「この配列作用によって我々はラングの観念に近づく」という。ここで言う「配列作用」とは何か。

ソシユールは言語のメカニズムは記号が他の記号と結ぶ二つの種類の関係からなるという。連辞関係と連合関係である。連辞関係とは接頭辞、語幹、接尾辞から語にいたる形態素が、その上位の単位である複合語、句、文などの「連辞」を構成するときの秩序であり、時間軸上に言語単位が並び結合するときの「順序のルール」である。一方、連合関係とは、言語意識の中に潜在する何千何万という言語記号が他の記号と何らかの共通性によって結びつく連想のリゾーム状ネットワークである。のち構造言語学はこれを「範列連関」などと呼ぶことになる。

この連辞関係と連合関係が、配列作用なるものに深く関わっている。配列

作用とは「受け取られる語詞像が複数であるかぎり少しずつ意識に到達するあの全体を配列する」とあるように、聴き手の意識に到達する話し手の音声「配列=整序」することである。言語音を聞いて理解するとは、生理現象・物理現象としての音声（一人一人異なる声色）を聴覚像という心的パターンへと変換し、届いたその複数の聴覚像を連辞関係と連合関係という言語の秩序にしたがって整理することである。

たとえば「今日は晴れました」という発話を考えよう。日本語を理解しない者にとってそれはどこに切れ目を入れて良いのかわからない音の連続体に過ぎない。だが、日本語話者には「キョーワハレマシタ」と聞こえる。たった一秒程度の音長が八つの拍という単位に分かれて聞こえる。音素に分けるなら一秒を「kjowaharemasita」と十五個の単位に分節していることになる。そしてこのように音の単位が聞き取れるということは語の意味、文の意味も聞き取れていることにほかならない。「キョー」という聴覚像には「今日」という名詞の意味が、「ワ」には「は」という助詞の意味が、「テンキ」には「天気」という意味が…同時に聞き取られる。どのようにしてか。第一は「キョー」「ワ」「ハレ」「マシ」「タ」という順に並ぶ必然性が言語意識にインストールされているからだ。「ワ」「マシ」「ハレ」「キョー」「タ」では意味にならない。連辞関係が働いているのである。第二に「今日」が理解されるためには「明日」や「昨日」も知っていなければならない。「明日」も「昨日」も知らない者は「今日」の意味は理解できないだろう。助詞「は」の意味がわかるということは助詞「が」「も」「こそ」…を知り、それらの間の機能の共通性（自立語の後に付き他の語との関係を示したり、文に意味を加えたりする）と違い（「は」は判断の主題を提示する）がわかっているということだ。これは連合関係の働きである。このように配列作用とは連合関係・連辞関係からなる言語シス

テムが発揮するメカニズム以外のなにものでもない。だからこそ「この配列作用によって我々はラングの観念に近づく」のである。

さて、ソシュールは、このようなシステムとしての言語が集団の意識の内に成立することを「蓄積」「社会的結晶化」と呼び、つぎのように問う。

あの蓄積、社会的結晶化をもたらすのは回路のどの部分だろうか。どの部分でもよいわけではない。物理的部分ではない。だからこそ知らない外国語の音に驚かされるのだ、というのもその時我々はラングという社会的事実のうちにいないからである。[J：もし我々が外国にいたら、われわれはラングという社会的事実のうちにいない、とはいえ聴取によって物理的事実にはあずかるのである]

(断章番号 223–226、コンスタンタンのノート。[J：……] はジョゼフのノート)

ソシュールは社会的という属性を言語の特性として見ている。すなわち、

(社会的なのは) 感受的、配列的部分なのであり、これこそ様々な個人のうちの一つの [言語という] 寄託を形成するものである、この寄託が全ての個人において絶妙にも一致したものになるにいたるのである。

我々にとってラングとはこの領域にほかならない。それは、諸個人において、対応して配置された諸概念に結び付けられている無数の語詞イメージである。 (断章番号 229, 232、コンスタンタンのノート)

このようにソシュールは聴き手が受け取った音声 (まだこの段階では「物理

音」である)が、言語のメカニズムによって心的・社会的なものとしての記号(聴覚像と概念の結合としての)に、配列という作用を通して変換するシステムに言語の本質を見ている。

ここにたって上でソシユールが発話の回路を様々に分割した意図が明らかになる。心的、生理的、物理的の三分割は、心的な領域で聴覚像と概念の結びつきとして存在する記号を、生理的なもの、物理的なものを排除して取り出す操作の、受動的と能動的の分割は、能動側(話し手、発信者)ではなく受動側(聴き手、受信者)における配列作用に言語の本質を特定する操作の地ならしであったのである。そこで、心的、生理的、物理的と能動、受動の規定は、言語と発話の定義においてつぎのように割り振られる。

言語…心的、受動的、社会的

発話…生理・物理的、能動的、個人的

この割り振りから、ソシユール以後展開された言語音声の研究における分野形成が明快に説明できる。すなわち、プラハ学派音韻論以来、言語音(心的なもの)を対象とするのは音韻論、生理的・物理的なものとしての音声进行研究するのは音声学と分化したが、ソシユールの心的 vs 生理・物理的の分析に正確に対応している。

発話の回路の議論を通してソシユールがたどり着いた言語と発話の定義を実際に見てみよう。

言語：受動的で集団の中に住まう。言語活動を組織し、言語能力の行使に必要な道具を形成する社会的コード。(デガリエ、p.178、断章 245)

上で我々が予想した諸属性の言語と発話への割り振りに合致している。では

発話はどうか。

発話：能動的で個人的。

1. 言語活動をめざした言語能力一般の使用（発声など）。
2. 同じく、個人の思考にしたがった言語コードの個人的使用。

（デガリエ p.178、断章 246、247）

定義1は上での我々の予想に整合する。だが、2は発話における心的なものであり、心的なものを言語に、それ以外を発話にという予想は覆された。これはソシユールの概念分割の破綻だろうか。真意はどこにあるのか。聴き手、話し手という軸で、諸属性の分配を考え直してみよう。

聴き手：心的（配列作用）、生理・物理的（聴取）、社会的

話し手：心的（発話2）、生理・物理的（発声=発話1）、個人的

つまり、話し手の側にも聴き手のがわにもそれぞれ心的、生理的、物理的の諸領域がある。だが、心的イクオール言語ではなく、話し手における心的部分は発話2（個人の意思による言語使用）であり、聴き手における心的なもののみが言語を体現するのである。ここにソシユール理論における話し手と聴き手の非対称性がある。ソシユールの言語概念がつとに聴き手の側に足場を定めた概念構成であることがここでも確かめられるのである。

むすび

ロマーン・ヤーコブソンは、第二次大戦中亡命先のニューヨークでレヴィ＝ストロースに手ほどきした音韻論の講義をもとにした『音と意味について

の六章』の中で、意味に関わる限りでの言語音の研究という音韻論の基本的立場を打ち出すために『講義』（CLG, p.158）からシニフィアンとシニフィエの結合としての言語記号を、上向きの矢印と下向きの矢印を両側に配した楕円の図形で説明する図を引いている（Jakobson, p.23）。もちろんそれに対応する学生ノートには、下から上への矢印が一本添えられた図しかない（本稿 p. 87 の図参照）。

音韻論は構造言語学の最も成功した分野と言われるが、これになつたプラハ学派の雄ヤーコブソンも、ソシュールにおける聴く立場への定位には無関心だったようだ。

コミュニケーションの図式と云えば、発信者、受信者、コード、メッセージ、コンテクスト、接触の六要素を配したヤーコブソンのそれが有名だが、その原型とも言うべきソシュールの発話の回路は、前者にくらべればあまりに単純で楽天的にさえ思える。だが、ソシュールの図式は、その発話者と聴取者の強い非対称性に気付くとき、一見した単純さにも関わらず、人間が言語活動にかけるものの重さ、切実さ、不条理さを隠しているようにも思えてくる。

なぜソシュールの言語概念は聴き手の側にあるのか。言語活動（langage）の最小単位は二人の話者の間で交わされる発話である。両者の関係は、どちらが話し手にまわり、どちらが聴き手にまわるかに関わらず、常に話し手—聴き手という非対称である。話し手はその思考を言語化する。発話すべき思念が浮かんだ時それはたちまちそれに対応したシニフィアン（聴覚像）に変換される。記号の選択に逡巡は殆どないだろう。だが、聴き手において「理解」というプロセスはそれほど簡単ではない。聴き手がまず受け取るのは、まだ意味を伴わないある長さの物理音であり、それはどこにも切れ目のない連続体である。これをどのように分割し、どの記号へと「変換」するかには

複数の可能性がある。聴き手にとり、話し手から与えられる音声は解読すべき暗号にはかならない。ここには正解の保証されない不安がある。この意味で聴き手とは不安の主体である。

一般にすべての発話は話し手から聴き手への働きかけとしてのオースティン的な意味での「言語行為」(参照、J. L. Austin, 1962)である。その根底にある原初の「発語内行為」は「理解せよ」という命令・要請であろう。一方、聴き手の「聴取」もまた一つの「言語行為」であり、それはこの根底的要請に手さぐりで応えようとする「解読作業」である。ここで働くのが、ソシュールが「配列作用」と呼んだ、ラングのメカニズムであり、そこにラングなるシステムの「存在理由」がある。ラングという記号体系は、原初の「理解せよ」に応える聴き手の「不安の中の跳躍」の、別の現れなのである。ソシュールの言語とは、言語の主体とは無関係に、話し手—聴き手の非対称性と無関係に、ぽっかり中空に存在する抽象物ではない。コミュニケーションの不安と切り離すことのできない、つとに語用論的・現象学的な間主観的概念なのである。

一見、そのあまりの明快さによって後世に多大な影響を残したかに見えるソシュール理論に、人間なるものもともと抱えている、一筋縄ではいかない不透明さが秘められているのではないか。構造主義が取り逃がしてきたソシュールは、明快さの中の不透明として、その理論のいたるところに潜んでいるのかもしれない。

註

- (1) 本稿は、2008–2009年度成城大学特別研究助成(研究課題名「恣意性をめぐって——言語学と哲学のあいだ」)による研究成果の一部である。

- (2) 1916年発刊の『講義』の編者たちが最もよく参照したと思われる第三回講義のノートはデガリエのものである。デガリエを上回る量のノートをとっていたコンスタンタンの資料がもたらされたのは1958年のことであり、当然バイイとセシュエがこれを参照することはなかった。
- (3) p.85の4月25日の図と同じノートに基づく。絵柄の違いは校訂版の違いによる。

略号

CLG: Saussure, Ferdinand de, 1922 [1916], *Cours de linguistique générale*, Payot

文献

Austin, J.L., 1962, *How to do things with words*, Harvard College (J.L. オースティン、坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978)。

Jakobson Roman, 1976, *Six leçons sur le son et le sens*, préface de Claude Lévi-Strauss, Minuit.

SAUSSURE Ferdinand de, 1916, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye, avec la collaboration de Albert Riedlinger, Lausanne et Paris, Payot.

— 1968, 1974, *Cours de linguistique générale : Édition critique*, par Rudolf Engler, tome 1, tome 2, Wiesbaden, Harrassowitz.

— 1993, *Troisième cours de linguistique générale (1910–1911)*, édité par Eisuke Komatsu, traduit en anglais par Roy Harris, Oxford, Pergamon Press / Elsevier Science.

末永朱胤、1998、「遂行的なものとしてのラング —ソシュールの言語概念再考—」『フランス語フランス文学研究』No. 73。

Suenaga Akatane, 2005, *Saussure, un système de paradoxes—Laugue, parole, arbitraire, et inconscient*, Lambert-Lucas.